

# 光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家  
 編集／光の子 編集委員会  
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277  
 TEL／0480-72-3883  
 振替 東京3-128022  
 印刷 (株)ドモン企画



おいしい!!ーいちご狩り

## 耳ある者は聞くがよい (マタイ十三・十五)

理事長 福島 勲

年老いて、耳の遠くなる人は長生きするといわれるが、医学的に根拠のあることなのか、それとも慰めの言葉に過ぎないのだろうか。ずい分聞こえの悪いと思う人に、ひょいと悪口でも言おうものなら案外と聞こえていたりして、恐れいれることがある。

こんなときの耳はどうなっているのだろうか。

「耳ある者は聞くがよい」とイエスは言われる。このときの耳は心であり、注意すること、関心をもつこと、真剣に考えること、専して信じることである。

馬耳東風、馬の耳に念仏といった言葉にみるように、なにを聞いても心に達しない人がいる。イエスは念を押して語られる。

イエスの言葉は聞えても、それを自分のものとして理解し、そのように実行に移すことはなかなか困難である。

人間はこの弱さ、善き業への無能さ、救われる価値のない人間を強く説いたのが、第一次大戦後のドイツの神学者バルトである。そしてただ神のあわれみ、キリストの功によってのみ救われるという、人間の否定から神の肯定を、とくいわゆる弁証法神学(危機神学)である。

聖書に行いによらず、信仰によって義とされると説いているところである。

孔子は、学んで思わないのは罔(くら)い。思うて学ばないと殆(あやう)いといっている。(為政篇十五)

聞きかじりで得々としている人は、いかにも利口そうだが、事理を究めている人からみれば、到底の浅いあぶなかしい存在である。

生半可でおしゃべりな人は、それだけが報いであり、あとになつて取り返しをつかないことがしばしば起こってくる。

ユダヤのラビは、人には耳が両

つあり、口は一つよりない。これはしゃべることの二倍も多く聞いてよく学び、よく考えてからしゃべれという神のおしめしであると教えている。

画家のゴッホは激しい衝動の中で自分の片方の耳を切り落した。僧明恵は、いちずな修業の中で自分の耳を切りとった。明恵の場合、鼻をそばげば経文を読むとき鼻水が垂れただろうと、可成冷静に、しかしわれわれには真似のできない真剣さで耳を切り落して、心の耳を得ようとしたのである。われわれは、昨年来、ずいぶんと嫌な悲しい声を聞きつづけた。どんな声の中にも、神のみ旨を聞きわけける心の耳をもつことが必要だった。

聖書には「耳ざわりのよい話」に警告が出ている(第二テモテ四・三)。虚栄心をくすぐるような話には注意を要するが、よちよち歩きの施設に、そろそろ、責任ある人から「耳寄りの話」を聞かせてほしいものである。

### ご支援に感謝して

施設長 今関 公雄

光の子どもの家の施設認可は、昭和六十年七月一日付であり、最初の入所児は七月十一日であった。したがって本年七月で満一年となります。波乱に満ちたこの一年数ヶ月を振り返るとき、まず何よりも皆様に子どもと職員一同が、明るく元気で施設の満一才の誕生日を迎えようとしていますことを感謝をもってご報告申し上げます。そして、私どもが今日あるを得ている背後には、多数の庶民の方々の善意が大きく貢献していることを忘れることが出来ません。おそらく、これらの支援者の方々が無ければ、当園の歩みは早々に挫折していたかもしれせん。本当に有難うただ感謝あるのみです。当園の支援者の方々は、施設職員の親類や知友があり、マスコミ報道による施設危機への激励支援者・団体があり、キリスト教会(学校)と関係者、社会福祉関係者・団体、同窓会(生)、地元関係者・諸団体、匿名者など、本当に多種多様な人々で構成されています。八五年度で、寄付者は約六百件にもなり、あわせて多数の物品寄贈者の方々がおられます。社会福祉施設の場合、入所児の生活費・職員の人件費や一般管理運営費は、措置費という公費負担でまかなう仕組みになっています。当園が、皆様のご支援を必要とした理由は何でしょうか。それは、先の公費負担以外の自己負担金が軌道に乗るまで大変に苦しい点にあります。この法人本部会計が、施設経営の土台であり潤滑油の働きをするので、寄付金活動がどうしても必要不可欠となります。とくに当園の場合、昨年四月開設予定が地元の激しい反対運動で七月開設に遅延した期間の人件費や運営費の予算、赤字分、建物建築における多額を借入金返済、土地取得費の支払期限の切迫、生活環境整備としての外構工事・植

栽関係・建物追加工事、各種入金、基準外職員の人件費(都合により一名分を自己負担中)などの諸経費の自己負担金が多額となりました。寄付金の役割大です。

ところで、光の子どもの家の支援者の方々は、文字通り「貧者の一灯」に特徴があるといえます。目を見張るような多額の寄付金は、皆無といってもよいでしょう。ですから、親や家庭の愛情を受けることの出来ない子どもたちへの真の同情と、福祉活動への熱き連帯の真情の現れと実感しています。庶民の善意は健在なり、とても云い得まじょうか。なかには、施設で育つなど苦しい子ども時代を過ぎられた方も少なからずおられます。私どもの仕事振りもまた、貧者の一灯の精神で益々励みたいと心を新たにするものです。「持てる者が持たない者に」ではなく、少しいものをお互いに「分かち合い」、共に喜び共に悲しむなかで、「共に育つ」ものでありたいと念じます。子どもたちの健やかな成長のために、今後とも皆様の温かい御支援をお寄せ頂ければと存じます。

### 文化を失った

子どもたち

黛 執(俳人)

三、四年前、私の住む湯河原町で、作家の永六輔さんが講演をされたことがある。六輔さんは冒頭で文明と文化のちがいにについて触れ、満員の聴衆に向かってこう問いかけた。

「見まわしたところ、若いお母さん方が圧倒的に多いようですが、その若いお母さん方におたずねします。お母さん方は、毎朝お子さんにご飯を炊いてあげていますか。」

「いっせいに手が挙がった。『ほら、これはすごい。ほとんどの全員がご飯を炊いてあげているんですね。』」

と驚いて見せたあと、六輔さんはちょっと皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「ことによると皆さんは思いちがいをなさっているんじゃないでしょうか。皆さんが自分で炊いたと思いついてるご飯は、実は電気釜やガス釜で炊いたものではあり

ませんか。そうならそれは、電気会社やガス会社が炊いたご飯ですよ。皆さんはただお米を放りこんで炊いていただけ。」

湧き起った笑いを押さえつけるように、六輔さんはつづけた。「私がいう自分で炊いたご飯とは、薪で炊いたご飯のこと。」

「いいですか、よく聞いてください。電気やガスでご飯を炊くのが文明です。薪の煙を目にみさせながら心をこめてご飯を炊く、これが文化です。」

六輔さんは会場の外を指さした。「美しい伊豆の海がここから見えます。その浜辺で、年老いた漁師さんが空を見上げて明日の天気はいい当てる。これは立派な文化です。気象衛生からの写真やコンピュター処理してつくる気象庁の予報が文明です。おもしろいことに、気象庁より漁師さんの予報の方が当る確率は高いのですよ。」

こうして六輔さんは、文明は頭脳がきずき上げたもの、文化は自然との深い交りのなかから人間のハートが生み出したものであることを説き、現代は文明が文化を押しつける時代だと歎いた。自然への畏敬を忘れた文明が、ついにはバイオテクノロジーといった生命の神秘にまで及び、遺伝子の組み替えによってこれまで地球上に存在しなかった新しい生命体もつくりだすところまでできてしまった怖しさと冒瀆を語り、文化の復権を強く叫んで講演を結んだのであった。

この話から思い当ることは、私たちがのまわりにくらでも、たとえれば子供のあそび。むかし私たちが竹を削ってつくった竹トンボは、まぎれもない文化である。いまの子どもたちは竹トンボはおろか、ナイフを使ってリングの皮すら満足には削けないといわれる。手の文化を失った子どもたちのその指先は、いまパソコンのキーを叩くの夢中である。何万回叩いても、そこからはけっして文化は生まれはしないのだ。

ご他聞にもれず私の町でも山や畑の宅地化がさかんで、緑が削りとられてウサギ小舎が増殖している。つい先日、そんな一画のどう見ても安普請のアパートから若い夫婦が出てきて、ピカピカのベントンに乗りこむのを見た。何に乗ろうと「からすの勝手」だが、いかにもアンバランスな印象はぬぐえない。おそらくベントンのローン返済のために奥さんまでがパートに駆りだされているのだろう。そしてアパートの一室には、バック入りの冷たい食餌とテレビゲーム機を当てがわれた子供がひとり残される。こうして文明の利便と享楽を追いまわした結果として、家庭からおふくろの味が消え、台所の文化がなくなり、家そのものの文化が瓦解してゆく。こんな環境のなかで、情操ゆたかな子供が育つわけはない。

いま問題になっているいじめや非行など少年たちの心のゆがみも一口で言うなら環境が文化を失ったからではあるまいか。その責任は、百パーセント大人たちにある。

一九八六年度児童福祉週間記念特別寄稿

### ある事件——養護施設を考える

岩崎美枝子

とても残念な事であったが、大阪で最も歴史の古い養護施設H社で、ある中学生の男児を中心に何人かが、小学一年生の女児をリンチにかけ死亡させてしまうという事件が起きた。

この事件の報道に接した、少なからずH社を知る多くの者は、「とうとう!」「やっぱり!」という思いがしたのである。H社は、定員二五〇名という大施設である。その施設がこの二〇年間一人の指導員Q氏(今春より施設長に就任)によって牛耳られ、体罰を中心にした養育方針がとられていたという。

事件を起した少年は、果して加害者なのか。彼は、ただ指導員から自分にされた事をしたにすぎない。まして親からも虐待を受けていた彼を施設がしっかりと受けとめ指導出来なかったという意味で、は現代風の青年達である。一一五

名の参加者の前に立って、彼等は実にやさしく勇気のある発言を堂々と述べたのである。

S君は、中学一年の時、四階の会議室にQ指導員に呼ばれ、暗幕をしめ電灯も消した真暗な中で真裸にされ竹刀で殴られたという。日頃から悪さの方だとは思って、それでも何故に叱られているのかわからず、ただ殴られながら、明るくて人の見ている前ではこの人は子どもを殴れないのだ、と思っていたという。

M君は、H社の子は暗い。いつも殴られ、何かあると犯人にさせられ、自分が出せなかった。子ども同士で訴えた事もあったが、相手にされなかった。今まで何も出来なかったのは、僕達に勇気がなかったからだ。この集りが遅すぎた。一人の子どもが死ななければ出来なかった事がくやしいと、泣きながら訴えた。

Y君は、かなり小さい時から、「何故、僕はここにいるのだろう」と考え続けてきたと話す。「施設にいた時はQ指導員が大きくて強いように思っていたが、社会に出

てからは彼が小さい人間に思えたとも語るのであった。

K君は、7年H社にいて一度親に引き取られ、再び奈良の施設に入った。養護施設の子も達は、皆抑圧されている。社会に出てからも人間関係がうまく持てない。H社も奈良の施設も、どこも上から下へ支配されることを考え直しては、養護施設そのものを考え直してほしい、と大きな声で訴えた。

それに比べて、元職員達からはただただQ氏への被害者意識しか語られず、かつてQ氏の云う通りに子ども達を殴っていたという職員からも、子ども達への詫言が一言も言葉にはされなかった。一度として、子どもの処遇をめぐって職員が話し合いをもった事がなかった。保母と指導員が立ち話をしただけで、Q氏より逐一の報告が求められ、話をする事を禁止されたという。Q氏のやり方に批判的な言動をとる職員には、Q氏の手内の職員によって尾行が付けられ全ての行動がスパイされたという。結局は、しつようで陰險な迫害の末に自からの人間性を守る

ために辞職するしかなかったという。

それにしても、少なくとも六十人近くいる職員達の中の、たった一人のQ氏、上にはおもねり下には強い男だったかもしれないが、逃れようのない場にいる子ども達をおいて、その子ども達のためにいるはずの職員達が、辞職する事しか出来なかったのかと、正直なところ私は思ってしまう。

それに引きかえ、子ども達は、彼等が訴えるその劣悪な環境の中で育ったとするなら、何に支えられて今日の彼等があるのだろうか。同じく一人の子どもの死に接して集い発言した者達の中で、かくたる差がどうして生れるのだろうか。

私は、人間が集団で「生活」をさせられるという事は耐えがたいとおもっている。施設養護への批判として個別養護(里親)の開拓に取り組んできた者である。一人の子どもが血の繋がりを越えた一組の夫婦に愛される事によって、信じられない程に見事に変貌していくのを幾組も自分の目で確かめてきた。しかし、その反対に

個人であるが故の限界をいやという程見せつけられてもきた。それでも、一人の子どもにとっても、しっかりと愛されているという関係を、例えばそれが誰とであっても体験出来る事が、人として、成長する上でとても大事な事だと信じている。その上に愛されているという関係が、固定的で、継続的で、安定している事が望ましいし、その関係を維持しようと努力する事が重要であると考えている。

その確実な例として幾組かの養親子や里親子をあげる事が出来る。しかし、正直に告白すると、そういう風に育てられた私達の養子や里子達の中で、H社の卒園生達と同じだけの事を発言出来る子どもがどれ程いるだろうかと思うのである。

勿論、比較する事自体むづかしい事であり、一人に近いH社の卒園生の彼等はほんの一握りの子ども達かもしれない。彼等は、H社を出たが故にグレてしまった者も多いと発言もした。里子達にたまたま発言すべき場がないからかもしれない。しかし、ごくあたり

まえに愛されて育ったであろうと思ふ一般家庭の子ども達の中で、「いじめ」が蔓延し、それに立ち向える子どもがほとんどないと聞くと、私達が常日頃、子ども達がよく育つために良い環境を用意してやりたいと努力しているが、良い環境におかれなかったところで、思いがけず子どもが成長しているのかもしれないと思うのである。

私のこんな発言を聞けば、彼等は怒るであろう。H社で育つしかなく、そのハンディを背負って社会に出、自分の生い立ちと社会の偏見に自らを立ち向わせ、戦い、乗り越えるための作業が即ち自己を克服するまでの過程がどんなに辛く、厳しいものであったかは、想像に難しくないからである。出来ることならそんな苦勞をさせてほしくはなかったと、彼等は言うだろう。それでも私は、彼等のそのつらく厳しい自己克服の過程が、一体何に支えられたのか、誰によって支えられたのかを、知りたいと思うのである。

日本の養護施設の全てが、H社のようなわけではない。どう

すれば施設という形態の中で、家庭に代わる子どもの養育の場を保証する事が出来るかと、職員全員が真剣に考え、悩み、実践しようと努力している施設もある。

先日、私が「光の子どもの家」を訪れた時、子ども達は数日前の激しい雨で出来た潦の中で泥水をかけ合って喜々として保母さん達と遊んでいた。もうすでに一般の家庭の子ども達からは、そういう楽しみをきれいな好きな母親達によって奪われてしまったと思いが、なつかしく眺めていた。

私達は、つい子ども達を護ることばかりを考えてしまいがちである。護ることは勿論大事ではある。護ってやれる事にも限界がある事を、余程私達は肝に銘じておかねばならないと思うのである。

(家庭養育促進協会)

現場から  
育ちゆく子らと 3

秋元 光代

五月九日、児童福祉週間の行事として、岩崎美枝子さんに講演をしていただきました。主として「赤ちゃん返りの大切さ」についていろいろお話しを伺ったのですが、その中で特に印象に残ったのが、このお話です。

この子は二歳の女の子です。里親にひきとられました。ある日突然普通食を食べようとしなくなり、ミルクを欲しがったのです。里親さんは、この子の要求を受け入れ、哺乳びんでミルクを飲ませました。その次には離乳食を欲しがったので、離乳食を段階をおってあげたところ、また元のように普通食が食べられるようになったのです。

「あの時は気がつかなかったけど、赤ちゃん返りだったのでね。」その里親さんは、後にそう言っていたそうです。年齢も低く、うっかりしている赤ちゃんと返りとは気がつかない例ですが、小さいながらも自分の欲求を知っていて、そ

ることを覚えるということ、Mちゃんには必要なことだったので、舌やあごは、乳児と同じで、味も知らなければ、かむということもできなかったのです。

みじん切りの肉を一つぶ。小さなきゅうりを一枚。これを口に入れるということは、とても大変、ましてかむということは並大抵のことではありませんでした。毎日、一時間半くらいかけて食事を取り、「噛み噛み、ごっくん」と保母に言われつづけます。それでも大人の親指くらいの大きさのレタスを食べ、「おいしい」と言いながらMちゃんをみて、噛む・食べるということの難しさを感じ、また、自分が何の苦勞もなくそれができるといことが、なんだか不思議なことのように思えました。



入所から一ヶ月くらいたって、夏休みということもあり、千倉の海に行くことになりました。砂の上を、保母さんに手をひかれて歩くMちゃんの足どりをみてハッとしました。私はその時、Mちゃんより体も大きく、なんでも食べら

現場から  
光の子らしくく 2

岩崎まり子

「Aちゃん、お兄さんとお姉さん、どっちが欲しい？」  
「んー お姉さん。」

少し考えてから、照れくさそうにAちゃんは答えました。Aちゃんには、Aちゃんのことを可愛がってくれて、優しくされること、心地良さを教えてくれるようなお兄さん、お姉さんが必要だと、ずっと思っていました。

そんなAちゃんのところへ去年の十二月二十七日、待望のお兄さんがやって来ました。  
K君 Aちゃんとは、たった一つ違いのお兄さん。ちよつとぶたれただけで  
「〇〇ちゃんがやったあ。」  
と大泣きするお兄さん。 どん

なときでもAちゃんをかばってくれて、守ってくれて……という最初の姿を期待は、その時点で崩れてしまいました。  
でも、今思うとそれで良かったのです。もし、あのとき、私の抱

けれど、K君の言語面での問題点をもっと別にあつたのです。話せなくても、伝わらなくても別に構わない——彼には、人に自分のことをわかってもらいたい、伝えたいという気持ちがあるから、かかったのです。

そして、K君と二人だけの昼食が始まりました。「いただきます」と「ごちそうさまでした」言わなければ食べられない、終わらない。どうしても言わなければならぬ、言おうとして欲しい、そう祈っていました。始めてから数日間、オーム返しさえも満足にできないK君の言語発達に、いえ、あのときの私は確かに応えてくれないK君自身に苛立っていました。今、改めて謝らなくてはなりません。ごめんなさい、K君。あなたは一日毎に着実に自分を伸ばしていったというのに、そのことには取っ付いていない自分ではないです。

「(うた)だき)ます」が「S……ます」になり、様々な変化を続け、現在の「いただきまます」「ごち



現場から  
心細さの中で  
5  
上棟圭子

「早く元気になって帰って来てね」Nちゃんその願いを私はとうとう叶えられないままNちゃんとお別れすることになりました。たった一年で病気になるって辞めるのなら初めから保母にならなければよかった、今、私はそんな気持ちでいます。子どもたちへも職員の人たちへも迷惑をかけただけで終ってしまったのですから。Nちゃんとの出会いが保母と子どもの関係でなければ、この別れもなかったでしょう。保母という職業を通してのNちゃんとの関係。病気になるってしまえば保母は保母としての働きは出来ません。母親なら自分の出来る範囲でNちゃんを育てていけばいいのです。けれど保母としてNちゃんと暮している私には職業という厳しい壁があります。いくらNちゃんがかわいくても、Nちゃんと別れたくなくても、弱った体ではこのハードな仕事は出ず、他の保母さんたちへの迷惑

手な感傷です。Nちゃんももし、大人のように話が出来たらきつと大人って勝手ね子どものためって言いながらも結局は自分のためじゃないか!

Nちゃん。ごめんね。けいちゃんももっと強かったらNちゃんを悲しませないで済んだのにね。本当にごめんさい。

以前、先輩の保母さんが、保母としての力が欲しいとおっしゃってました。でも私は保母としての力はいらなかった。ただの力で良かったのです。一日何時間働いても元気えられる程の体力がほしかったと思っています。

神さま。もし許されるのでしたら、離れて暮してもNちゃんに私がかたがたあられることをどうか教えて下さい。

けいちゃんへ

けいちゃん! どうして帰って来てくれないの? Nちゃんは毎日、早く良くなって帰って来ますようにお祈りしてたのに! 褒だよ、こ

養護メモ5  
義にかわく人々は

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、手に入れようと思えば大抵の物は手に入れることができる豊かなこの国で、親に抱かれて眠ることさえ叶わない不安で淋しい貧乏のなかに置かれていた子どもたちと、家族のように暮らそうと、決意する人々によって担われている。

際限のない愛情と努力が要求され、それに充分こたえることなど不可能と思われるようなことである。子どもが好きでなければできないが、好きでありさえすればできるものではない。

この仕事をするには、相当の決心が必要である。開拓の期から連綿と続けられてきた先人たちの厳しい闘いとそれを支えてきた決意は、受け継がれ、戦後の混乱期もきり拓いてきた。しかし、特に一九六〇年代からの急速な社会福祉思想の普及と福祉政策の整備など労働条件等の改善により、覚悟や決意はそれほど強調されることも

なくなり、公立施設の建設ラッシュもこの頃からじまると。聖職意識はやりきれないが、決意なしにするには要求が多すぎる。赤の他人が家族に代わり、人さまの子どもを育てるために一緒に暮らすのに、条件のよいにこしたことはないが、それで人が育てば世話は無い。

練もしなければならぬ。こう見ると、同じ時間のなかでしなればならない事がある。人間関係の最も基本である人が人を愛すること、どのように学習するのだろうか。報いを求めない他者へのプラスの行為。愛のなかにいる男女でも難しい。もつれてしまふと憎しみ、恨みにさえ変わる。これは、親子関係によって普通は学習する。健やかに子どもが育つこと、それだけのために親は生きることのすべてをかけることができる。

愛よりは圧倒的な憎しみのなかで育った子どもには、その憎しみの数倍もの溢れるような愛のなかで、少なくとも育ってきた時より長い間すこすしか手だてはない。信頼も、忍耐も、正義も……。

これは、到底できる話ではなくなる。誰にも。しかし、ほうっておけない。現実にそれを要求している子どもがいるのだから。何が出来るかわからない。エイッととびこむ。溺れている子どもを見て、救助法や泳げるかも考えず、飛び込むかどうかは決意だけの問題だ。福祉へのかかわりの原点と考える。

もうすぐ夏休み。子どもの多い家の親たちのうんざり顔が思われか山、あるいは手近のプールへも行けばいい。しかし、養護施設ではうんざりしてはいけない。子どもにとってのゴールデン・タイムが学校や幼稚園からもどってくる。日頃の関係づくりの不足を取り返す絶好のチャンスだ。実習生やボランティアに子どもを頼んで夏休みなどと呑気に構えてはいけぬ。学習の遅れを取り返す。お盆にはできるだけ家族と過ごせるようにを凝らして家族の問題に取り組み、家に帰れない子どもは担当者との外出や担当者の実家に連れて行く。海を知らない子どもたちだからなんとか海へ、タカラクラブのご好意で軽井沢にも……などなど、光の子どもの家では、二年目の夏休みの計画におおわらわ。殆ど二四時間抱束のような働きに、自ら更なる働きを積上げる仲間の決意がきらめいている。

持っている力をはるかに超える訓練しなれない質も量も時にしなれない質も量も

日誌抄

四月十六日、六月十五日

四月十六日、仙道家のM君のお母さんが突然面会に。お父さんと外出の予定でM君はでかける。親権を持つ父に、母には会わせないと強く言われている。怒って帰ろうとする母に父の帰りを待ち、話し合い、今後の方向を考えよう。と説得。朝から夜まで待ってもM君も父も帰らない。とうとうこの夜帰らず。母が泊まって朝まで待つ。十七日の夕方、あれっ外泊するって言わなかったっけ。とぼけて帰る。担当の倉沢保母、元夫婦の父と母家族関係担当などで、1. 親のための子どもではなく子どものための親として何ができるか、しなければならぬか。2. 父や母の都合で離婚したが、同時に父と母を欲しがる子どもは養沢か。3. 子どもを育てるのに施設、父に母を加えると子どもは困るか。などを話し合った結果、1. 母の面会を認める。2. 子どもを育てるために話し合いは、

光のこどもの家の中継してする。3. 子どもの前ではお互い相手の悪口を言わないなどを確認。お母さんに数ヶ月ぶりに抱かれ、照れ臭そうにMくんは眠った。二十日、原田家のEちゃんのお父さんがお兄さんたちと来る。久しぶりの再会。二三日、全国養護施設協議会人権委員長長谷川先生より入所制限等の経過とその後の状況の調査。五月三日、児童福祉週間記念行事。宮沢湖へバスでピクニック。小雨が。でも楽しい一日でした。八・九日、児童福祉週間記念事業。『岩崎美枝子氏と子育てを考える』座談会と講演会。氏の養育に関する卓越した理論、経験と鋭い洞察に裏打ちされた展開に、痛烈な刺激と自己覚知の二日でした。十四日、十九日、小学校家庭訪問。二一日、M君の母来訪。その後夫と自分の母も加わって話し合った。色々あったがやり直そうということになった。ついてはよろしく、と。M君を抱いて泊る。二五日、東大宮教会野外礼拝出席。二五日、三愛学園高瀬園長外十三

名来訪。見学と交歓。二七日、K四兄弟(小一、五才、二才、各男 四才女)入所。二九日、原田家のEちゃんのお母さん数カ月振りに、突然に。Eちゃんを抱いて三泊する。三一日、第七回理事会(決算)午後二時から。一九八五年度の事業報告、決算報告などを審議。六月三日、東京電力久喜営業所橋所長よりホットプレート等をありがたう運動の一環としてご寄贈いただき。尚、施設内の照明がよく出来ている、と。後日、電線用古ドラムを園庭のテーブルにと運んで下さる。感謝。十四日、この三月、建築専門誌に掲載以来、建築家などの見学が続いていたがこの日も東京青山第一工房の岸本一級建築士など来訪。評価をいただく。十五日、父の日。大利根藤幼稚園では父子登園。Eちゃん、Nちゃん、Mちゃん、T君のお父さんが、Yくんは正月に倉沢保母の家で仲良しになった絵見ちゃんが朝早くから。ありがとう。うれしい一日でした。

反射光

一番上の花が咲くと梅雨が明けるといふ立葵がずいぶん上まで花をつけ、伸びあがって本格的な夏を呼んでいます。○光の子も二年目七号を数えます。御支援を心から感謝します。○初めて迎える児童福祉週を記念して行事と事業を実施してささやかに祝いました。○大阪で養護施設の限界を拡大する開拓的などりくみを二〇年を超えて展開している家庭養護促進協会の岩崎美枝子氏をお招きした記念事業の特集をとお考えでしたが、養護施設の子どもが殺されるといふ事件が発生、これにかかわった氏の報告の稿が届き、四、五面に掲載しました。御意見御感想などお寄せ下さい。○小学生六名、幼稚園八名、二・三才児八名計二二名との暮らしのリズムのなかで、ふと、激しい反対運動とそれを煽る悪意に満ちた妨害に翻弄された去年と重なる日々が去来します。○この厳しい草創のときの苦闘を共にした仲間の上棟圭子が戦列を離れます。暫くの休養と新らたな出発に恵みと祝福を(哲